

「おはようございます。○月○日○曜日朝の定時放送を行います。笠松中学校生徒のアナウンスで放送します。」

皆さんは、毎朝6時50分に各家庭に設置された防災行政無線から流れる声を聞いたことがありますか。

笠松町の防災行政無線放送は、朝・昼・夜の3回、行政のお知らせなどを定時放送しています。

放送のアナウンスは、町職員が担当していますが、朝の定時放送だけは笠松中学校の生徒がアナウンサーを務め、今年度は94人の応募があったとのこと。

中学生アナウンサーは学校の授業が終わると、役場の無線室に出向き、決められた放送日の原稿を録音します。アナウンスする内容は、選挙のお知らせや検診の案内など、中学生になじみの薄い内容も多く、何度も録音し直すこともあるそうですが、いつも前向きな姿勢を見せてくれます。何よりも嬉しいことは、中学校生活の3年間、毎年アナウンサーに応募している生徒が多くいることです。

定時放送の録音を担当する役場企画課の職員に話を聞くと「自分の声が町内に流れる緊張感や伝えることの大切さを感じて、一生懸命に原稿を読む姿が見られます。」と話されました。

何度か録音するうちに声の出し方や話し方が上達しているのが、無線放送からも伝わってきます。

生徒の保護者からは、「自分の子どもの放送日に録音した」という話もお聞きしました。

何気なく“聞いて”いた防災行政無線放送でしたが、生徒の成長を感じる「声」に耳を傾けて“聴いて”みると、「温かい心」も一緒に伝わってくる気がします。



無線室でアナウンスをする生徒

かきまつの民話「昔むかし」

畑つなぎ ④

「だが、この訴えは、徳川さまの工事に文句をつけることになる。いくらものわかりのよいお代官さまも簡単にはお許しになるまい。このままほっておけば孫子の代には、村々が沼地になってしまう。わしら四人は、牢屋に入れられるのを覚悟で、堤防を造らせてくれと申し出てくる。」

一瞬村人の中からざわめきがおこったが、村人の目は、再び庄屋さまへ釘つけされていった。続いて丹蔵さまがすくつとたちあがった。

「いいか。わしらが牢屋へ入れられたとわかったら、この兵蔵のいうとおりにするのだ。」
兵蔵は、つえをたよりに立ちあがった。そして大声でいった。
「庄屋さまは、死を覚悟していなさる。わしらのために死を

覚悟していなさる。みな衆、わしらの願ひも庄屋さまの願ひもただひとつ、堤を造るこつちや。いいかのう。」

兵蔵はよろけるからだをささえながら、

「庄屋さま方がつかまつたどわかつたら、その夜から男も女も衆も、たもとやふどころにいったいの土を毎夜二回だれにもわからんように、あの畑つなぎにはこぶのじや。」

土は、田の土、畑の土どこでもよい。そして、川ばたの畑と畑の間をうめるのじや。それができたら盛土をするのじや。加納側よりすこしでも高く盛るのじや。一年かかっても、二年かかってもわしらの村を守るために、ふところやたもとで土をはこぶのじや。」
兵蔵は、みまわした。(つづく)

※かきまつの民話「昔むかし」は昭和54年に発行されました。中央公民館 松枝公民館 総合会館でご覧いただけます。